



湖月抄

徳富蘇峰



石渠文庫

花散里

奇よきて巻の巻とせり きたの巻とせり
郭に花らう里とよみてそとよ 細 源氏廿四巻六月の事也
賢本の巻れ末と同一友のうきくねと六月とよりせり事
あつじや夕立の比とも 此巻を賢本の巻れとありハ前とえ
えしり 花咲日 祿名院殿以後はらうこの巻は源氏の本意ハ
のりば巻ハ悔悟ヨセよりちり源居のあしりありてやうては
へららりろひわれハ悔悟とさあやうくハ 柳は人のことば巻
よとてうて云おしりあよ花散里のよと云

人たれぬ 細 源の公 膠月夜

花散のうきよとてはるんを
つらまつく 柳は人のことば巻
あつじや夕立の比とも 此巻を賢本の巻れとありハ前とえ
えしり 花咲日 祿名院殿以後はらうこの巻は源氏の本意ハ
のりば巻ハ悔悟よりちり源居のあしりありてやうては
へららりろひわれハ悔悟とさあやうくハ 柳は人のことば巻
よとてうて云おしりあよ花散里のよと云

人たれぬ 河 公 膠月夜

花散のうきよとてはるんを
つらまつく 柳は人のことば巻
あつじや夕立の比とも 此巻を賢本の巻れとありハ前とえ
えしり 花咲日 祿名院殿以後はらうこの巻は源氏の本意ハ
のりば巻ハ悔悟よりちり源居のあしりありてやうては
へららりろひわれハ悔悟とさあやうくハ 柳は人のことば巻
よとてうて云おしりあよ花散里のよと云

ひこのはつらつをのこ
孟花らるる星のまへおは花ら
る里のくまのうりりひに
て女のこころらんとそのこ
つとまへへ
のうらとまへへ 細はな
る里のこころとまへへいられ
まへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思

あがまよまへへ
細和琴也河和琴とは
調わり
あまへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ

うららのまのまのま
桂こころとまへへ
風こころとまへへ
細はな
彼をまへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ

わづらうららと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ
細はな
あがまよまへへ
細和琴也河和琴とは
調わり
あまへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ

桂こころとまへへ
風こころとまへへ
細はな
彼をまへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ
あがまよまへへ
細和琴也河和琴とは
調わり
あまへへと今にやむと相
表はまへへつとけまへへと思
ひまへへとせまへへと思
とつとまへへ

うつれどもあやうり嘆づくてよひなるぞとて
らん殿とせり三屋の 柳 小萩八重のまんでん借ゆんわねがけり三をとりめ
ゆがりくわたり
盃疑ふと原の内とて
もうねよるまうにりて
こまこのゆきていあは
わしづい 細 由りのをさ
也げ町からぶうとて
原成のうとつりわよる
ゆがりつるまうあやう 異同
おこころふととわり
ぬのまがねはゆがりつる
よーと

そいもあまのこころをわたりて
ほろろと泣くもまうとてわらわら
なまがねつるまうあやうのま
しめれどわがこころをわたりて
と人ちねぬらまねぬとてわらわ
おたり 惟志ん 盃の
あまわればまうとてわらわ
けとけあまのまあおまらとて
いづれのまあまうとてわらわ
お者もありまうとてわらわ
くまもわがこころをわたりて

世に惟志も春のうさねやんえんえん
人ちねぬ 細 うつりの女の人今ま
女のねとてあは 唯曰
こもつしんさ 細 惟志も
所り女もまうりまうりまうり
まうりまうり 所 元気がれ
はく一のあせら 細 大武の
娘流ふけけのひんく 花日 所
日五節舞も 津見原天皇 聖制也 勅撰 巻一
本年とてと 細 ちづるまうと

あまのこころをわたりて人のま
とてわらわのいとわらわとて
あまのこころをわたりて人のま
のなまがねつるまうとてわらわ
わらわのこころをわたりて人のま
のこころをわたりて人のま
く人めわらわとてわらわとて
とてわらわとてわらわとて

人むあやせ

とりの世のさげし

細んがりのわうんとも

わりのあやせりあやせりあやせり

又とりのとりの根を治すはもまにけりはの性なり。世のまにけり

らひたり悪のまにけりあやせりあやせり

わうん 細 中川のまのまにけりあやせりあやせりあやせりあやせり

よすがりぞとりの人なるべし

